

箴言におけるツエデク／ツエダカー／ツァディーク

—新共同訳訳語の批判的検討— (上)¹

小林 洋一

序

『新聖書大辞典』は「義」について、「義は旧約聖書において、もっとも重要な概念の一つであり、『聖』と並んで、またそれと結びついて神の本質を端的に示す言葉である」と解説している²。ところで『聖書』(以下「口語訳」)の旧約聖書において120回あった「義」という言葉は、『聖書 新共同訳』(以下「新共同訳」)では、2回(創世15:6とマラキ3:20)³と激減してしまった。口語訳でも同様に「義」と訳されている、2箇所のうちの一つ、創世記15章6節は、ローマの信徒への手紙4章で論じられている「信仰義認」と関係している箇所なので何となく納得が行く。もう1箇所のマラキ書3章20節の「義の太陽」(口語訳も同じ、但し、4:2と章句がずれる)という語句

1 本稿は、西南学院大学を会場に開催された日本基督教会九州部会(2003.3.28)での口頭発表「箴言におけるツエデク／ツエダカー／ツァディーク—新共同訳訳語の批判的検討—」に大幅な加筆を加えたものである。なお筆者は、「新共同訳」の批判的検討ということで、これまで以下のような考察を試みてきている。「人はいつアダムになるのか—創世記1～5章の「アダム」の訳をめぐる」『西南学院大学神学論集』第53巻第1号(1995.9), 1-24。「研究ノート—レアの目—」同上第56巻第1号(1998.10), 71-80。「ラピス・ラズリ?—新共同訳の批判的検討—」同上第59巻第1・2合併号(2002.3), 1-14。

2 「義」『新聖書大辞典』(キリスト新聞社, 1984), 361。G.フォン・ラート(荒井章三訳)『旧約聖書神学 I—イスラエルの歴史伝承の神学—』(日本基督教団出版局, 1980), 492参照。

3 創世15:6とマラキ3:20で「義」と訳されているヘブライ語は両者とも「ツエダカー」である。

は、聖書では、ここにしか出て来ない独特なものである。この語句の背景として、太陽神を正義と秩序の保持者と考える原初の神話があると考えられるが、マラキ書では、来るべき「正義と秩序」あるいは「救済」の比喻として用いられているのであろう⁴。それにしても、これが、どうして新共同訳で「義」と訳された二つのうちの一つとなったのか、興味の引かれるところである。

さらにエゼキエル書14章14節の「義人」として有名な三人、ノア、ダニエル、ヨブも「その義によって」（口語訳）ではなく、新共同訳では「その正しさによって」自分たちの命を救うことになっている。このように見てくると、ヘブライ語聖書の「義」の翻訳をめぐる状況が新共同訳では様変わりしてしまった観がある。

さて、この「義」に関係するヘブライ語聖書の言葉として צַדִּיק (ツェデク) (男性名詞), צַדִּיקָה (ツェダカー) (女性名詞) があり⁵, その同語根として צַדִּיק (ツァディーク) (形容詞あるいは名詞) がある⁶。ツェデク／ツェダカー／ツァディークは⁷, 同語根の言葉であるが故に統一的・共属的に理解されるべきであるが、これらの語をそれぞれ、どのように日本語に翻訳すべきかは、実のところなかなか困難な問題であり続けている。

本稿では、新共同訳で様変わりしてしまったかに見える「義」の状況に触発されて、「義」と直接的に関連するツェデク／ツェダカー／ツァディークの新共同訳訳語を批判的に検討しようとするものである。但し、ツェデク／ツェダカー／ツァディークの訳語の検討にあたっては、ヘブライ語聖書全体

ではなく、検討範囲を知恵文学の一つである箴言に限定している。新共同訳のみならず、口語訳の箴言にさえ「義」という訳語が1回も出てこないにもかかわらずである。何故箴言なのか。その直接の理由は、筆者がたまたま『聖書教育』54巻第1号(2003年2月)に箴言の教案を書く機会が与えられ、その執筆の過程で、箴言における、特に、ツェダカー／ツァディークの新共同訳訳語に問題を感じるようになったためである。従って、箴言に限定しているのは、学問的理由あるいは紙幅の故ではなく、個人的な理由によることを、まずお断りしておかなければならない。

さて、ツェデク／ツェダカー／ツァディークは、箴言では思いのほか多く現れる⁸。特に、ツァディークは、箴言においては、ヘブライ語聖書の中のどの書よりも多く現れる。即ち、ツァディークはヘブライ語聖書全体では、206回現れるが、箴言では、66回現れる。二番目に多く現れるのは詩編の52回である。三番目はエゼキエル書の16回である。これは預言書では一番多い数である。1000語当たりの頻度数でいうと、箴言は6.62%と断トツに多く、二番目はハバクク書で、2.96%である(但し、3回)⁹。三番目は詩編で1.73%である。箴言には名詞としての「知者」、「賢者」あるいは形容詞としての「賢い」を意味する「ハハーム」もツァディークと同じくらい多く出てきて、他の書に比較して断トツに多い。このことから箴言はハハームの書であると同時に、ツァディークの書でもあると言うことができよう。ツァディークとハハームが明らかに並行語になっている例も散見される(箴9:9, 11:30, 23:24)¹⁰。

ツェデク／ツェダカーの頻度も箴言において決して少なくはない。まず、ツェデクが一番多く現れるのは詩編の49回である。神が世界を裁く行為に関連して多く出てくる(例えば、96:13, 98:9)。その次はイザヤ書の25回

4 Cf. H.H. Schmid, *Gerechtigkeit als Weltordnung: Hintergrund und Geschichte des alttestamentlichen Gerechtigkeitsbegriffes* (Tuebingen: J.C.B.Mohr, 1968), 142.

5 ヘブライ語では、多くの場合、名詞は動詞から派生する。Francis Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament with an Appendix Containing the Biblical Aramaic* (Oxford: Clarendon Press, no date), 842-843 (以下このオックスフォードのヘブライ語辞典をBDBで表記する)によれば、動詞 צַדִּיק あるいは צַדִּיקָה は名詞からの派生語である。

6 但し、口語訳では、ミシュパートが「義」と訳させられている例が1回ある(ヨブ27:2)。

7 本稿でのヘブライ語のカタカナ表記はアクセントを重視しての表記なので、必ずしも母音符号の長短の忠実な表記とはなっていない。

8 但し、箴言に צַדִּיק の動詞が現れるのは1回(17:15-ヒフィール分詞)だけである。

9 頻度の%は Accordance Bible Software Scholar's Collection 4 (Altamonte Springs, FL, OakTree Software, Inc., 2002) による。

10 箴言には祭司、レビ人、預言者への言及がない。但し、諸書の中の哀4:13では、祭司と預言者がツァディークと対比されている。

である。三番目に箴言の9回が来る。9回は、決して多い数とはいえないが、詩編やイザヤ書と比較して箴言が小書であることを思えば、それほど少ない数とも言えない。1000語当たりの頻度は、詩編(1.63%)、イザヤ書(0.98%)に次で、箴言は三番目(0.90%)となる。ツェダカーの場合も、一番多いのがイザヤ書36回、次が詩編の34回であり、三番目はエゼキエル書で、22回出て来る。箴言は四番目で、18回出て来る。しかし、箴言の18回は1000語当たりの頻度の数としては最高(1.81%)となる。因に、次はマラキ書(1.53%、但し2回)であり、三番目は詩編(1.13%)である。以上の頻度数からも、箴言において、ツェデク／ツェダカー／ツァディークが重要な言葉となっており、それらの言葉の検討を箴言で行うことはそれなりの意義があるものと考えられる。

課題検討の順序としては、まず、箴言におけるツェデク／ツェダカー／ツァディークの現代の聖書訳の比較を通して訳語の現状を把握し、次に、ヘブライ語本文、口語訳、新共同訳の訳文を引用しながら、ツェデク／ツェダカー／ツァディークの用語法と語義を分析し、最後に新共同訳訳語の適否について批判的検討を加えたいと考えている。

1 箴言におけるツェデク／ツェダカー／ツァディークの訳語の比較

新共同訳の訳語が他の現代の聖書訳とどのような関係にあるのかを知るために、主要な聖書訳をサンプルとして取り上げている。

聖書の略語表

口語訳：『聖書』(日本聖書協会, 1985).

新共同訳：『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』(日本聖書協会, 1988).

新改訳：『聖書 新改訳』(日本聖書刊行会, 1970).

岩波訳：『ヨブ記 箴言 旧約聖書XII』(岩波書店, 2004)

NRSV: *The Holy Bible Containing the Old and New Testaments: The New Revised Standard Version* (New York: American Bible Society, 1989).

NJB: *Neue Jerusalem Bibel: Einheitsuebersetzung mit dem Kommentar der Jerusalem Bibel* (Freiburg: Herder, 1992).

NEB: *The New English Bible with the Apocrypha* (Oxford University Press, 1970)

JPS: *The Writings כְּתוּבִים Kethubim: A New Translation of the Holy Scriptures According to the Masoretic Text Third Section* (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1982).

A 箴言におけるツェデク(9回)の訳語の比較

	口語訳	新共同訳	新改訳	岩波訳
1 : 3	正義	正義	正義	義
2 : 9	正義	正義	正義	義
8 : 8	正しい	正しく	正しい	義しい
8 : 15	正しい定め	正しい	正義	義しいこと
8 : 16	地 ¹¹	正しい	正義の	義しい
12 : 17	正しい証言	正しいこと	正しいこと	義
16 : 13	正しい	正しいこと	正しい	義しい
25 : 5	正義	正しく	義	義
31 : 9	正しい	正しく	正しく	正しく

	NRSV	NJB	NEB	JPS
1 : 3	righteousness	Gerechtigkeit	righteousness	righteousness
2 : 9	righteousness	Recht	what is right	what is right
8 : 8	righteous	recht	right	just
8 : 15	what is just	Recht	just laws	just laws
8 : 16	rightly	Recht	earth ¹²	righteous
12 : 17	honest evidence	was recht ist	the truth	faithfully
16 : 13	righteous	gerechte	honest	truthful
25 : 5	righteousness	Gerechtigkeit	righteousness	justice

¹¹ この「地」という訳については後述する。

¹² この“earth”という訳については後述する。

31 : 9 righteously gerecht just sentence righteously

箴言におけるツェデクを、新共同訳は、「正義」(1 : 3, 2 : 9)あるいは「正しいこと」(12 : 17, 16 : 13),そして形容詞的あるいは副詞的に「正しい(く)」(8 : 8, 8 : 15, 25 : 5, 31 : 9),と訳出している(但し、例外は8 : 15の「正しい掟」)。これは口語訳とあまり変わらない(例外は8 : 15の「正しい定め」と12 : 17の「正しい証言」)。そのような中で、新改訳が1回(25 : 5),そして岩波訳がその多くを「義」と訳出しているのが目を引く¹³。

外国語訳の間では取り立てて大きな異同は見られない。righteousnessとGerechtigkeitは通常「義」とも「正義」とも訳される言葉である。

B 箴言におけるツェダカー (18回) の訳語の比較

	口語訳	新共同訳	新改訳	岩波訳
8 : 18	繁栄	慈善	義	義
8 : 20	正義	慈善	正義	義
10 : 2	正義	慈善	正義	義
11 : 4	正義	慈善	正義	義
11 : 5	正義	慈善	正しさ	義
11 : 6	正義	慈善	正しさ	義
11 : 18	正義	慈善	義	義
11 : 19	正義	慈善	義	義
12 : 28	正義	慈善	正義	義
13 : 6	正義	慈善	正義	義
14 : 34	正義	慈善	正義	義
15 : 9	正義	従うこと	義	義
16 : 8	正義	恵みの業をする	正義	義

16 : 12 正義 神に従えば 義 義
 16 : 31 正しく 神に従う 正義の 義の
 21 : 3 正義 神に従い 正義 義
 21 : 21 正義 恵み 正義 義
 恵み 正義 義

	NRSV	NJB	NEB	JPS
8 : 18	prosperity	Glueck	rewards of virtue	success
8 : 20	righteousness	Gerechtigkeit	virtue	righteousness
10 : 2	righteousness	Gerechtigkeit	uprightness	righteousness
11 : 4	righteousness	Gerechtigkeit	uprightness	righteousness
11 : 5	righteousness	Gerechtigkeit	uprightness	righteousness
11 : 6	righteousness	Gerechtigkeit	uprightness	righteousness
11 : 18	righteousness	Gerechtigkeit	goodness	righteousness
11 : 19	righteousness	Gerechtigkeit	righteousness	righteousness
12 : 28	righteousness	Gerechtigkeit	honesty	righteousness
13 : 6	righteousness	Gerechtigkeit	to do right	righteousness
14 : 34	righteousness	Gerechtigkeit	righteousness	righteousness
15 : 9	righteousness	Gerechtigkeit	righteousness	righteousness
16 : 8	righteousness	gerecht	honestly	righteousness
16 : 12	righteousness	Gerechtigkeit	righteousness	righteousness
16 : 31	righteous	Gerechtigkeit	virtuous	righteousness
21 : 3	righteousness	Gerechtigkeit	what is right	what is right
21 : 21	righteousness	Gerechtigkeit	right conduct	to do good success

まず、口語訳では、ツェダカーをほとんどの場合、ツェデクと同じように「正義」と訳出して、両者の間に大きな区別を設けていない(例外は、8 : 18の「繁栄」)。新改訳もほぼ同じ傾向をもっていると言ってよいであろう。

¹³ 岩波訳のツェデクの訳としての「義」は、多くの場合『関根正雄 新訳 旧約聖書 第IV巻 諸書』(教文館, 1995)(以下「関根訳」と一致している。

但し、新改訳では、ツェデクを25章5節で1回だけ、「義」と訳出していたが、ツェダカーを、「正義」の他に「義」と訳出する頻度がより多くなっている(8:18, 11:18-19, 15:9, 16:12)。岩波訳ではツェデクとツェダカーを区別せず「義」と訳出している¹⁴。そのような中において、顕著な特色は、新共同訳である。新共同訳はツェデクとツェダカーの訳を明確に区別している。しかも口語訳、新改訳とは異なり、ツェダカーを1回も「正義」とは訳出していない。そのかわり、多くの場合「慈善」と訳し、その他「恵みの業」(16:8)または「恵み」(21:21)¹⁵あるいは「神に従う(い)」(16:12, 16:31, 21:3), 「従うこと」(15:9)と多様な訳を試みている。これは他の訳には見られないことであり、注目に値する。

外国語訳の方は、NEBの意識的訳語(例えば, virtue, goodness, honesty等)が目を引き、他の訳では8章18節以外、ツェデクとツェダカーの訳語上の差異はそれほど大きくない。

C 箴言におけるツァディーク(66回)の訳語の比較

	口語訳	新共同訳	新改訳	岩波訳
2:20	正しい人々	神に従う人	正しい人々	義人たち
3:33	正しい人	主に従う人	正しい人	義人たち
4:18	正しい者	神に従う人	義人	義人たち
9:9	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:3	正しい(人)	従う(人)	正しい(者)	義人
10:6	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:7	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:11	正しい者	神に従う人	正しい者	義人

10:16	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:20	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:21	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:24	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
10:25	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:28	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
10:30	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:31	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
10:32	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
11:8	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
11:9	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
11:10	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
11:21	正しい人	神に従う人	正しい者	義人たち
11:23	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
11:28	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
11:30	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
11:31	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
12:3	正しい人	神に従う人	正しい人	義人たち
12:5	正しい人	神に従う人	正しい人	義人たち
12:7	正しい人	神に従う人	正しい者	義人たち
12:10	正しい人	神に従う人	正しい者	義人
12:12	正しい人	神に従う人	正しい者	義人たち
12:13	正しい人	神に従う人	正しい者	義人
12:21	正しい人	神に従う人	正しい者	義人
12:26	正しい人	神に従う人	正しい者	義人
13:5	正しい人	神に従う人	正しい者	義人
13:9	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
13:21	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
13:22	正しい人	神に従う人	正しい者	義人

¹⁴ 関根訳では、ツェデクではなかった「正義」を、ツェダカーの多くの訳に当てており、これによりツェデクとツェダカーの一応の区別をつけようとしているように見える。岩波訳とは、その点で異なる見解を示している。

¹⁵ 21:21はツェダカーが2回出て来る。新共同訳はこれを「恵み」と繰り返し訳出しているが、口語訳は重複誤写と解して後者のツェダカーを削除している。外国語訳ではJPS以外は、同様に削除している。JPSは、最初のツェダカーを to do good, 二番目のツェダカーを success と訳出し、区別している。

13 : 25	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
14 : 19	正しい者	神に従う人	正しい人	義人
14 : 32	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
15 : 6	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
15 : 28	正しい者	神に従う	正しい者	義人
15 : 29	正しい者	従う者	正しい者	義人たち
17 : 15	正しい者	正しい人	正しい者	義人
17 : 26	正しい人	神に従う人	正しい人	義人
18 : 5	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
18 : 10	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
18 : 17	正しいように	正しく	正しく	正しい
20 : 7	正しく歩む人	主に従う人	正しい人	義人
21 : 12	正しい神	神に従う人	正しい人	義なる者
21 : 15	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
21 : 18	正しい者	神に従う人	正しい人	義人
21 : 26	正しい者	神に従う人	正しい人	義人
23 : 24	正しい人	神に従う人	正しい者	義人
24 : 15	正しい者	神に従う人	正しい人	義人
24 : 16	正しい者	神に従う人	正しい者	義人
24 : 24	正しい	正しい	正しい	義人
25 : 26	正しい者	神に従う人	正しい人	義人
28 : 1	正しい人	神に従う人	正しい人	義人たち
28 : 12	正しい者	神に従う人々	正しい者	義人たち
28 : 28	正しい人	神に従う人	正しい人	義人たち
29 : 2	正しい者	神に従う人	正しい人	義人
29 : 6	正しい人	神に従う人	正しい人	義人
29 : 7	正しい人	神に従う人	正しい人	義人
29 : 16	正しい者	神に従う人	正しい者	義人たち
29 : 27	正しい人	神に従う人	正しい人	義人たち

	NRSV	NJB	NEB	JPS
2 : 20	the just	Gerechten	the righteous	the just
3 : 33	the righteous	Gerechten	the righteous	the righteous
4 : 18	the righteous	Gerechten	the righteous	the righteous
9 : 9	the righteous	Gerechten	a righteous man	a righteous man
10 : 3	the righteous	Gerechten	the righteous	the righteous
10 : 6	the righteous	Gerechten	the righteous	the righteous
10 : 7	the righteous	Gerechten	the righteous	the righteous

以下省略

ツァディークに関しては、日本語訳の各訳は、18章17節あるいは24章24節の副詞的・形容詞的用法を除けば、それぞれにはほぼ一貫性を保っている。新共同訳は「神に従う人」でほぼ統一している（但し、17 : 15「正しい人」）。口語訳と新改訳はツァディークを「正しい者（人）」で統一し、岩波訳は「義人」と一貫した訳出を試みている（但し、21 : 12は「義なる者」¹⁶）。例外は、口語訳が21章12節のツァディークを「正しい神」と訳出していることにある¹⁷。

口語訳、新改訳は、ツェデク／ツェダカーを「正義」、「正しさ」、ツァディークを「正しい人（者）」と訳しているので、ツェデク／ツェダカー／ツァディー

¹⁶ 岩波訳は、ツァディークの複数形を字義どおりに「義人たち」と訳出している（但し、例外は29 : 2）。複数形は、口語訳と新改訳では2 : 20のみが、そして新共同訳では、28 : 12のみが複数形で訳出されている。なお、岩波訳は「義人」の訳において関根訳に一致している。

¹⁷ 新共同訳は、21 : 12を、ツァディーク（「神に従う人」）とラシャー（「神に逆らう者」）の対比の格言としている。しかし、口語訳はそうのようにしていない。ツァディークを人にとった場合、「悪しき者を滅びに投げられる」という行為が人の行為としてはいかにも不自然となる。メッサレーフ（「落とす」）はサラフ（to twist, pervert, overturn）のピエールの分詞であるが、この動詞は箴言に4回出て来る（13 : 6, 19 : 3, 21 : 12, 22 : 12）。主語は、それぞれ、「リシウアー（邪悪）」、「イヴェレト（無知）」、「ツァディーク」、「主の目」である。即ち、21 : 12以外で、主語が人（とした場合である）である例はない。ただ他の書のように（詩11 : 7, 119 : 137, 129 : 4等参照）、主あるいは神をツァディークとする記述は箴言には他に見られない。従って、ツァディークを人にとるか、あるいは神にとるかで揺れることになる。

クの語句の統一性・共属性が感じられる。岩波訳の「義人」にもツエデク及びツェダカーの訳が「義」だったので、それが感じられる。それに比較すると、新共同訳は、ツエデクを「正義」、「正しい」、ツェダカーを多くの場合「慈善」、さらにツァディークを「神に従う人」と訳出しており、訳の統一性・共属性という点で違和感がある。ただ、新共同訳はツェダカーを数回「神に従う」とも訳出しているので、ツェダカーとツァディークの統一性・共属性が全く見られないというわけではない。

外国語聖書訳の間ではツァディークの異同は見られないだけでなく、ツエデク／ツェダカー／ツァディークの統一性・共属性もよく保たれている。

以上、ツエデク／ツェダカー／ツァディークの現代の聖書訳の比較から分かることは、新共同訳のツェダカーの「慈善」やツァディークの「神に従う人」等の訳語はユニークなものであり、新共同訳の試みの斬新さを感じさせるものであるということである。

II 箴言におけるツエデク／ツェダカー／ツァディークの用語法と語義の分析

箴言における新共同訳のツエデク、特に、ツェダカー／ツァディークの注目すべき訳語の適否を判断するために、以下において、箴言におけるツエデク／ツェダカー／ツァディークの使用法と語義の分析を試みたい。ツエデク／ツェダカー／ツァディークの使用法と語義の分析にあたっては、並行語・類義語・同義語あるいは対語の検討と共に、当該語の現れる文脈の分析が重要となる。しかしながら、箴言の場合、文脈の確定が困難な格言の収集からなっている場合が多く、文脈で括って検討をすることには困難が伴う。そうは言っても、章句の順序に従ってただ漫然と検討するよりは、少しはまとまりをもって検討する方がより分かりやすいとの思いから、関連テーマ、鍵語等によってできるだけ括っていくことにした。その際、あまりうまくいっていないものや、複数の括りにまたがっているものについては、その都度指摘する。

一般的に、箴言には構成上時代的なギャップがあると考えられている。例

えば、二項対立的格言の多い箴言の中心部分である10-29章(22:17-24:34は除く)は捕囚前の収集であるが、箴言の序論となる神学的色彩の強い教訓詩の1-9章は捕囚後の収集と考えられている¹⁸。捕囚前の収集と捕囚後の収集に言語の意味範囲及び含意をめぐる何らかの変化を想定することは可能である。そのような観点から、最も古い格言の収集と考えられている中心部の10-29章から検討するのが筋かも知れない。しかし、本稿では煩雑さを避けるためにあえてそのようにしていない。ただ、編集上の問題については必要に応じて考慮するつもりである。なお、本稿の目的が箴言の格言の解釈ではなく、訳語の適否の検討なので、格言の釈義は必要最小限にとどめている。

我々の関心事は、口語訳が新共同訳で、どのような変化、修正、進展を見たのかにあるので、以下において、新改訳と岩波訳は必要に応じて参照するとどめ、ヘブライ語本文¹⁹、口語訳(口)、新共同訳(新)を併記して検討の対象としている。本稿はあくまでも新共同訳訳語の検討なので、当該ヘブライ語章句の引用は新共同訳をベースにしている。従って、ヘブライ語カタカナ表記の後の()中に記されている訳語は、筆者が訳語として適切とは思っていないとも新共同訳のものを記している。

A 箴言におけるツエデクの使用法と語義

箴言にはツエデクの複数形は出て来ない。全て単数形である²⁰。ツエデクは不思議なことに1-9章と似た教訓詩的文体をとる箴言22章17節-24章には現れない²¹。

ツエデクの語義について、オックスフォードのヘブライ語辞典BDBは基

18 Cf. R.E. Murphy, *Proverbs* (World Biblical Commentary 22; Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1998), xx-xxi.

19 ヘブライ語本文は Accordance Bible Software Scholar's Collection 4 による。

20 箴言だけでなく、ヘブライ語聖書全体でもツエデクの複数形は出て来ない。

21 断定できないにしても、一般的には、箴22:17-23:11(-23:14)は古代エジプトの知恵文学「アメンエムオベトの教訓」に依拠していると考えられている。

本の意味あるいは根本義として ‘rightness, righteousness’ を挙げている²²。これを念頭におきながら、以下、括りに従ってツェデク用語法と語義について検討する。

1 知恵 (1 : 3, 2 : 9, 8 : 8)

(1) 1章3節

לְקַחַת מוֹסֵר הַשֶּׁבֶל צְדָק וּמִשְׁפָּט וּמִיִּשְׁרָיִם

(口) 賢い行いと、正義と公正と公平の教訓をうけさせ、(下線は筆者、以下同じ)

(新) 論しを受け入れて 正義と裁きと公平に目覚めるため。

1章3節では、口語訳と新共同訳のツェデクの訳は一致して「正義」となっている。1章3節の文脈である1章2-4節には、知恵の教訓書としての箴言の目的が前置詞ラメッドの頭韻を踏む形で記されている。その目的との関連で、3節に、ツェデク、ミシュパート、メーシャリーム(「正義と裁きと公平」)が並行的に出て来る。これらは類義語であり、このように重疊的に用いられることにより、各語が同じ現実を描き、互いに意味を補完あるいは強化し合っている²³。

ミシュパートは動詞「シャファト」(裁く、支配する)から派生した男性名詞である。メーシャリームは動詞「ヤシャル」(滑らかである、真直ぐである)から派生した男性名詞の複数形である²⁴。

ツェデクとミシュパートの結合は箴言に2回現れるが(1 : 3, 2 : 9),

22 BDB, 841-842. L. Koehler, & W. Baumgartner, *Hebraeisches und Aramaeisches Lexikon zum Alten Testament Vol. III* (Leiden: E. J. Brill, 1990), 942-943 (以下 BHL) がツェデクの意味として最初に挙げているのは *das Rechte* である。

23 岩波訳はこれらの類義語をそれぞれ「義」、「正法」、「正直」と訳出している。

24 類義語の中で、メーシャリームだけが複数形をとるのは、一人の人にとっての公平が、他の人にとってはそう見えなように、公平の見方の多様性を示唆している可能性がある。Cf. “Discussion,” ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), 251.

2回ともツェデクが先である(ミシュパートが先の場合、申16 : 18, イザ1 : 21)。A・ホーによれば、ツェデクがミシュパートに先立つと、裁判における法の倫理的側面、即ち、正義/公正が強調される²⁵。この場合のツェデクは、ミシュパート、メーシャリームとの並行的併置から推察する限り、「正しさ」を意味すると思われる。その「正しさ」は2節との関連で、知恵ある行動を指していることは理解できるが、どのような正しさなのかは、ここからだけでは判断が難しい。

1章3節と同じツェデク、ミシュパート、メーシャリームの並行的併置は2章9節にも見られる。

(2) 箴言2章9節

אֵן תִּבִּין צְדָק וּמִשְׁפָּט וּמִיִּשְׁרָיִם כָּל־מַעֲוֵל־טוֹב

(口) そのとき、あなたは、ついに正義と公正、公平とすべての良い道を悟る。

(新) また、あなたは悟るであろう 正義と裁きと公平はすべて幸いに導く、と。

ここでも口語訳と新共同訳のツェデクは一致して「正義」と訳されている。ツェデク、ミシュパート、メーシャリーム(「正義と裁きと公平」)は、人を幸いの道に導くものとして描かれている(新共同訳は「道」を訳出していない)。マエガルートープ(口語訳の「良い道」)のトープは「幸い」あるいは「祝福」を意味する。ツェデク、ミシュパート、メーシャリームは「幸い」あるいは「祝福」の道の要件である²⁶。人は知恵を学び、それを理解することにより(1 : 2, 2 : 2-4)、結果的にツェデク、ミシュパート、メーシャリームに人を導くところの神を知ることによって到達する(2 : 5)²⁷。箴言1-9章の教訓詩では、ツェデクは、人を神の本質の理解に導き、神とより

25 Ahuva Ho, *Sedeq and Sedaqah in the Hebrew Bible* (New York: Peter Lang, 1991), 51.

26 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 57.

27 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 51.

近くなるための「良い道」の一要件と見られている²⁸。このことを考慮するならば、1章3節、2章9節においては、ツェデクは「神の本質」と結びつけられているが故に²⁹、「義」があてはまらなくもない(岩波訳参照)。

(3) 箴言8章8節

בְּצַדֶּק כָּל-אִמְרֵי אֵין בָּהֶם נִפְתָּל וְעַקֵּשׁ

(口) わが口の言葉はみな正しい、そのうちに偽りと、よこしまはない。

(新) わたしの口の言葉はすべて正しく よこしまなことも曲がったことも含んでいない。

口語訳と新共同訳はツェデクを同じように「正しい(く)」と訳している。8章8節は女性として人格化された知恵が語る言葉である。ベ・ツデク(「正しく」)は、「正しさ」にあることであり、それは「よこしまなこと」、「曲がったこと」の対極にある。従って、ベ・ツデク(「正しい」)とは「真実」あるいは「正直」という意味合いが強いであろう³⁰。

2 政治 (8 : 15, 16=裁判と共通, 16 : 13, 25 : 5)

(1) 箴言8章15節, 16節

① 箴言8章15節

בְּי מְלָכִים יִמְלֹכוּ וְרוֹזְנִים יִחַקְקוּ צָדֶק

(口) わたしによって、王たる者は世を治め、君たる者は正しい定めを立てる。

(新) わたしによって王は君臨し 支配者は正しい掟を定める。

口語訳と新共同訳はツェデクを大体同じように「正しい定め(掟)」と訳し

28 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 147.

29 「義」『新聖書大辞典』, 361参照。

30 R.B.Y. Scott, *Proverbs • Ecclesiastes* (The Anchor Bible 18; Garden City, New York: Doubleday & Company, Inc., 1965), 66は、ベ・ツデクを“honestly”と訳出している。

ている。両訳とも、ツェデクがハカク「制定する」あるいは「布告する」の目的語と見てツェデクを上記のように訳しているのであろうか。そのように見て直訳すれば、「支配者はツェデクを制定(布告)する」となる。

② 箴言8章16節

בְּי שְׂרָיִם יִשְׂרוּ וְנָרִיבִים כָּל-שֹׁפְטֵי צָדֶק

(口) わたしによって、主たる者は支配し、つかさたる者は地を治める³¹。

(新) 君侯、自由人、正しい裁きを行う人は皆 わたしによって治める。

支配者はツェデク(「正しい」)の裁きを行う者である。ここではツェデクは、ショフェティーム(「裁きを行う者」)の連語形の属格として形容詞的に使われている。

構文上もよく似た上記2つの格言は、女性として人格化された知恵が語る教えである。それによると、知恵は支配者の統治の手段であり、その知恵はツェデクと関係している。即ち、正しい法の制定(布告)とその正しい執行にツェデクは関わっている³²。その場合の「正しさ」とは創造の根源的秩序に呼応するものであろう。

箴言8章では知恵の誕生が語られ、8章27-29節では、古代の宇宙生成論に見られる「混沌との戦い」の神話的モチーフが見られる。即ち、神は知恵を通して混沌(カオス)を象徴する「深淵」(28節)、「原始の海」(29節)に境界設定をし、この世界の秩序を形成した。知恵にとって、創造とは混沌を取り除くことではなく、それに限界づけをすることであった。混沌も闇も滅ぼされたわけではない。人間は神の定めた境界線を越えて不正義に陥ちいる。

31 口語訳及びNEBは、多くの写本や古代訳を根拠に、この場合のツェデクはエレット(「地」)が誤写されたものと判断している。前節の15節の最後もツェデクなので、重複誤写の可能性もある。*Biblia Hebraica Stuttgartensia* (以下BHS) 脚注参照。

שֹׁפְטֵי צָדֶקは聖書ではここだけであるが、שֹׁפְטֵי אֲרָץの例は3回ある(イザ40:23, 詩2:10, 148:11)。判断が難しいが、本稿では本文を重視して、ツェデクを修正しないことにする。

32 イザ32:1参照。

それにより秩序が混沌となる³³。

上記のような創造論を背景とするとき、後のツェダカーの検討で見るところの箴言8章20節のツェダカーの道、ミシュパートの道は、神の救済意志に基づく根源的な秩序に呼応する道となる。知恵の語ることは、全て「ベ・ツェデク」(ツェデクにおいて、新共同訳「正しく」)(8:8)、即ち、最終的に秩序において生起し、可視的となることが示されている、ととることができよう³⁴。従って、神学的色彩の強い教訓詩1-9章においては、ツェデクは知恵との関係において、正義が優先する神の創造の根源的秩序を反映する、と解釈することが可能である³⁵。

8章15節が言及する王に関して言えば、古代イスラエルも近隣諸国同様、王は宇宙における神的秩序を代表している、と考えられていたと思われる。即ち、王としての権能を用いて、弱者を助けて正義をもたらし、社会的秩序に神の祝福を媒介する役割を持つと考えられていた³⁶。次に見る箴言の中心部分である10-29章もこのような宇宙観が根底にあると理解してよいであろう。

(2) 箴言16章13節

רצון מלכים שפתי צדק ודבר ישרים יאהב

(口) 正しいくちびるは王に喜ばれる、彼は正しい事を言う者を愛する。

(新) 正しいことを語る唇を王は喜び迎え 正直に語る人を愛する。

口語訳と新共同訳は、ツェデクに対して「正しい」という点で同じ意味を付

与している。この13節の王のラツォーン(「喜ぶこと」)で始まる格言は、直前の12節の王のトーエバー(「いとうこと」)で始まる格言と対をなしている。ツェデクの唇を喜ぶ王ということで、ここでは、ツェデクは連語形の属格として形容詞的に使われ、情動に関係する語となっている。この格言において「スィフェテー ツェデク」(「正しいことを語る唇」)は、「ドベール イェシャリーム」(「正直に語る人」と同義的並行関係にある。この場合のツェデクの意味としては、裏表のない「正直」を含意する「正しさ」が考えられる。

(3) 箴言25章5節

הגו רשע לפני מלך ויכון בצדק כסאו

(口) 王の前から悪しき者を除け、そうすれば、その位は正義によって堅く立つ。

(新) 王の前から逆らう者を除け。そうすれば王位は正しく継承される。

口語訳と新共同訳のツェデクの訳が異なっている。バツ・ツェデク(「正しく」)³⁷は副詞的用語法をもって、ラシャー(「逆らう者」)を取り除くことと対応関係にある。クーン(「継承される」-口語訳のように「確立される」と訳されるべきであろう³⁸)は正しく確立されることを意味する秩序と関係する言葉である。この格言は、ラシャー(「逆らう者」)を追放することで、ツェデクの秩序を保持すべきことが王の主要な課題であることが端的に表現されている。

この格言の5節は、直前の4節「銀から不純物を除け。そうすれば細工人は器を作ることができる。」と並行をなしている。このことから判断すると、5節の意味するところは、銀から不純物を除くことで、細工人は適切な器を作ることができる。それと同じように、ラシャー(「逆らう者」)が王の前から取り除かれる時、王位は適切に、真実に確立する。そしてそのような

37 箴言のツェデクで、冠詞がついているのはここだけである。

38 並木浩一「六『文学書』について」『日本の神学』30(1991)、207参照。

33 Cf. Jon D. Levenson, *Creation and the Persistence of Evil: The Jewish Drama of Divine Omnipotence* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1988), 17.

34 Cf. Schmid, *Gerechtigkeit als Weltordnung*, 97. Henning Graf Reventlow, "Righteousness as Order of the World: Some Remarks toward a Programme," ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), 165.

35 J・L・クレンショウ(中村健三訳)『知恵の招き-旧約聖書知恵文学入門-』(新教出版社, 1987), 240によれば、知者は「現実の空虚さに直面しながらも、正義が優先する永遠の秩序を展望し固守すべく戦った」者たちであった。

36 B・W・アンダーソン(中村健三訳)『深き淵より-現代に語りかける詩編-』(新教出版社, 1989), 218-219参照。詩72, イザ11:1-9参照。

王位は長く続き、よりよく機能する、ということになろう³⁹。ここには国家支配が正義の原則に従ってなされるべきであるとの感覚がある。口語訳の「正義」は悪くない。

3 裁判 (12 : 17, 31 : 9)

(1) 箴言12章17節

יְפִים אֱמוּנָה יְגִיד צְדָק וְעַד שְׁקָרִים מְרַמָּה

(口) 真実を語る人は正しい証言をなし、偽りの証人は偽りを言う。

(新) 忠実に発言する人は正しいことを述べ うそをつく証人は裏切る。

この二項対立的並行法の格言において、口語訳と新共同訳はツェデクを大体同じ意味で訳している。ヤフィーアハ(「発言する人」)は名詞でも、分詞でもなく、動詞のヒフィール未完了形(「彼は証しするであろう」あるいは「宣言するであろう」)であり、どのように訳すべきか困難が伴う。しかし、ツェデク(「正しいこと」)の意味は明瞭である。この場合、「うそ」の反対であり、偽りのない正しい証言のことである。ツェデク(「正しいこと」)は、エムナー(「忠実」, 口語訳「真実」)と並行関係にあり、意味範囲を共有している⁴⁰。ツェデクを語ることは正直に語ることであり⁴¹。裁判において正しい証言は、無実をもたらすものであり、それ故に正義を実現させるものである⁴²。

39 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 51. 安定する王政については、28 : 2, 29 : 14参照。
C.H.トイは、この「バツ・ツェデク」を「正しい補佐官、助言者とによって」と具体的にイメージしている。C.H.Toy, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Proverbs* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1988), 459.

40 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 53. 真実の証言については、6 : 9, 12 : 17, 14 : 5, 25, 19 : 5, 28, 21 : 28参照。

41 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 57.

42 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 53. 古代イスラエルでは、現代のような犯罪捜査の専門家もおらず、物的証拠の科学的検証もない世界であった。それ故に、証言の真実性は生死にかかわる重要性をもっていた。出20 : 16参照。

(2) 箴言31章9節

פְּתַח־פִּיךָ שְׁפֹט־צָדֵק וְדִין עֲנִי וְאֶבְיֹן

(口) 口を開いて、正しいさばきを行い、貧しい者と乏しい者の訴えをただせ。

(新) あなたの口を開いて正しく裁け 貧しく乏しい人の訴えを。

口語訳と新共同訳はツェデクを同じように「正しい(く)」と訳している。8節と共に裁判における母から若い王への警告である。8節と9節は対になっており、ペタハ-ピーハ(「あなたの口を開いて」)と同じ言葉ではじまる。ツェデクが目的語になっていると見て、「ツェデクを裁け」ととることも可能であるが、ここでのツェデクは副詞的に機能していると見るのが正しいであろう。ツェデク(「正しく」)で裁け、というのは、貧しさ故に偏り見ることなく、裁けという意味であろう⁴³。そのような裁きは貧しい者の権利の確立を助けることを意味する⁴⁴。この場合のツェデクは虐げられている者に共感をもたせる機能をもっている。

以上、箴言に9回出て来るツェデクを全て取り上げ、その用語法と語義を検討した。王政または裁判との関係での語義の確定はそれほど困難ではない。それは法的・倫理的に正しいこと、真実なことを意味しているからである。しかし、1-9章の教訓詩での知恵との関係におけるツェデクの語義の確定は必ずしも容易ではない。本稿では、8章における知恵の創造論との関係から、ツェデクは、創造の根源的秩序との呼応関係において判断される「正しさ」あるいは「正義」を意味すると考えている⁴⁵。

43 31 : 5, 8, 詩72 : 2 参照。

44 Cf. Murphy, *Proverbs*, 241.

45 Cf. Leo G. Perdue, "Cosmology and Order in the Wisdom Tradition," *The Sage in Israel and the Ancient Near East*, ed. John G. Gammie and Leo G. Perdue (Winona Lake: Eisenbrauns, 1990), 458-459.

B 箴言におけるツェダカーの用語法と語義

ツェダカーは、ツェデク同様、1-9章と似ている教訓詩の22章17節-24章34節には現れないだけでなく、22章以下には1回も現れない。ヘブライ語聖書には、ツェダカーの単数形と複数形の両方が出てくるが、箴言には複数形は現れず、全て単数形である。BDBはツェダカーの基本的語義として、righteousnessのみを挙げていて、ツェデクで記していたrightnessを落としている。両者の区別を少しは意識しているように見える⁴⁶。以下、ツェダカーの括りも可能な限りツェデクのそれとの対応を心がけた。

1 知恵 (8 : 18, 20)

(1) 箴言 8章18節

עֲשֶׂר־וְקִבּוּד אֵתִי הוֹן עֲסֵק וְצַדִּיקָה

- (口) 富と誉とはわたしにあり、すぐれた宝と繁栄もまたそうである。
 (新) わたしのもとには富と名誉があり、すぐれた財産と慈善もある。

8章18節は、女性として人格化された知恵が1人称で語る箇所である。次節の19節「わたしの与える実りは どのような金、純金にもまさり わたしのもたらす収穫は 精選された銀にまさる。」から18節のツェダカー(「慈善」)が知恵のもたらす「実り」の一つであることが分る。18節後句の「すぐれた財産」とツェダカーが並行をなしていることを考えると、新共同訳の「慈善」よりは口語訳の「繁栄」が文脈にあっていると考えられる⁴⁷。ただツェダカーに「繁栄」というような意味があるのかどうかの問題である。BDBは、「繁栄」と解釈すべき例として箴言のこの箇所と、ヨエル書2章23節(但し、新

共同訳は「救い」と訳している)を挙げている⁴⁸。

(2) 箴言 8章20節

בְּאֵרֶחֶב צְדָקָה אֶהְיֶה בְּתוֹךְ נְחִיבוֹת מִשְׁפָּט

- (口) わたしは正義の道、公正な道筋の中を歩み、
 (新) 慈善の道をわたしは歩き 正義の道をわたしは進む。

1-9章におけるツェダカーの道の概念規定は簡単ではないが、8章16節のツェデクで見たように、神の救済意志に基づく根源的秩序に呼応する正しい行いと解釈すべきではないかと考える。この教訓詩では、ツェダカーの道とミシュパートの道が並行関係にある。この並行関係を考慮するならば、口語訳の「正義」が「慈善」よりは合っているように思われる。

2 政治 (14 : 34, 16 : 12)

(1) 箴言14章34節

צַדִּיקָה תְרוֹמֵם־גּוֹי וְחֶסֶד לְאֻמִּים חֲטָאָה

- (口) 正義は国を高くし、罪は民をはずかしめる。
 (新) 慈善は国を高め、罪は民の恥となる。

この格言は14章28節「国が強大であれば王は栄光を得る。民が絶えれば君主は滅びる。」を補完するものであり、民の繁栄のためには人数だけでなく、ツェダカーも必要であることを説いている⁴⁹。この格言で、ツェダカー(「慈善」)はゴーイ(「国」)と関係させられ、ハッタート(「罪」)と対比させられ

46 BDB, 842. BHL, 943-944が、ツェダカーの意味として最初に挙げているのは Gemeinschaftstreue, Rechtlichkeitであり、ツェデク (das Rechte) とはそれなりに区別している。但し、ツェデクの意味に Gemeinschaftstreue も認めている。

47 すでに見たことであるが、岩波訳はもちろんのこと、新改訳もこのツェダカーを「義」と訳出している。Scott, *Proverbs • Ecclesiastes*, 73は、正しい者として是認する、という意味で、“approbation”(「是認」)と訳出している。

48 BDB, 842. 但し、BHL, 943-944では「繁栄」と訳す例は挙げられていない。William McKane, *Proverbs: A New Approach* (The Old Testament Library; Philadelphia: The Westminster Press, 1977), 350は、このツェダカーを「成功」あるいは「繁栄」と訳すことに対して、「正しいこと」と「富」との関係を単純化し過ぎる、と批判的である。

49 Cf. Murphy, *Proverbs*, 107.

ている点が注目される (13: 6 参照)。箴言にあって、罪は社会の道徳的安定を脅かすものである⁵⁰。罪と対比される語として「慈善」が適切かどうか疑問である。「罪」の対比として「義」もよいかも知れないが、国が絡んでいるので、口語訳の「正義」は悪くはない。

(2) 箴言16章12節

תועבת מלכים עשות רשע כי בצדקה יכון כסא

(口) 悪を行うことは王の憎むところである、その位が正義によって堅く立っているからである。

(新) 神に逆らうことを王はいとわなければならない。神に従えば王座は堅く立つ。

王のトーエバー(「いとうこと」)を語る16章12節が、王のラツォーン(「喜ぶこと」)を語る16章13節と対比的対になっていることについてはツェデクの項ですでに触れた。

箴言には21回出て来るトーエバー(「いとう」こと)は本来祭儀的用語であり、ヤハウエ(「主」)が忌み嫌うものを意味する。従って、箴言でもその多くはヤハウエがトーエバーの主体である (11: 1, 20, 12: 22等)。しかし、この1箇所だけが、王がトーエバーの主体になっている。

この格言は、ツェデクのところで見た箴言25章5節の後半、וַיִּכּוֹן בְּצִדְקָה כִּסְאוֹと類似している⁵¹。前句の内容も似ている。王座は堅く立つために、25章5節では、王の前からラシャー(「逆らう者」)を取り除くことが、そして16章12節では、王がレシヤ(悪)を行うことをトーエバー(忌み嫌うこと)することが語られている⁵²。

同じ事柄が、どうして一方はツェデクを使い、他方はツェダカーを使っているのであろうか。文体的理由である可能性がある⁵³。ともあれ、これはツェデクとツェダカーの相換性を示唆する箇所と考えられる⁵⁴。新共同訳は、ビ・ツェダカーを「神に従えば」と訳出しているが、ツェデク/ツェダカーの相換性を考えると、16章12節の訳「神に従えば」は、25章5節の「正しく」という訳語に、もう少し近づけた方がよいのではないかと考える。

3 経済 (10: 2 = 命と死, 11: 4 = 命と死, 11: 18, 16: 8)

(1) 箴言10章2節, 11章4節

① 箴言10章2節

לֹא-יִוָּעֵלוּ אוֹצְרוֹת רָשָׁע וּצְדָקָה תַצִּיל מִמוֹת

(口) 不義の宝は益なく、正義は人を救い出して、死を免れさせる。

(新) 不正による富は頼りにならない。慈善は死から救う。

この格言では、対立的並行法により不正の富とツェダカー(「慈善」)が対比されており、ツェダカーは人を死から救う力を持っているものとして人格化されて語られている⁵⁵。

富が敵視されているのではなく、ツェダカーなしの富には価値がない、あるいはツェダカーに基礎づけられるときにのみ富は価値をもつという意味であろう⁵⁶。R・E・マーフィーは、ここでのツェダカーの意味として、主によ

50 Cf. Robin C. Cover, "Sin, Sinners," in *The Anchor Bible Dictionary VI* (New York: Doubleday, 1999), 31-40. この場合のヘセドは「恥じ」を意味する。Cf. BDB, 340.

51 詩89: 15では、同じ構文でツェダカーのかわりにツェデクが、箴20: 28ではバツ・ツェデクではなく、バツ・ヘセド(「慈しみによって」)となっている。

52 29: 14では、王座がとこしえに堅く立つためには、弱者をエメト(「真実」, 新共同訳「忠実」)をもって裁くことが条件づけられている。

53 25: 5と25: 4の意味上の並行性については、ツェデクの項で触れたが、両節は4節のツォレーフ(צֹרֶף)と5節のツェデク(צֶדֶק)に綴り上の近似性が見られる。4節のツォレーフ(צֹרֶף)に引きずられて、5節がツェダカーではなく、ツェデク(צֶדֶק)になった可能性も考えられる。

54 聖書の訳語の比較で見たように、岩波訳はもちろんのこと、新改訳も、25: 5のツェデクと16: 12のツェダカーをそれぞれに「義」と訳出している。

55 このような格言での死は、年が満ちてからの死ではなく、それ以前の不幸な、あるいは突然死を意味している。トイは、不正や暴力によって得た富は神あるいは人間(法的、私的)の報復をもたらし、長命と平穏な生活の保証とはならないことを意味していると捉えている。Toy, *Proverbs*, 198-199.

56 Cf. McKane, *Proverbs*, 422.

て認められる正直な生活を考えている (10: 3 参照)⁵⁷。口語訳の「正義」よりは「正しい行い／善行」がここではよいのではないかと考える。

ツェダカーの人格化についての全く同じ表現が11章4節にも見られる (10: 2b と 11: 4b は全くの同文)。

② 箴言11章4節

לֹא-יִוָּעֵל הוֹן בְּיּוֹם עָבָרָה וּצְדָקָה תִּצְלֵל בְּמָוֶת

(口) 宝は怒りの日に益なく、正義は人を救い出して、死を免れさせる。

(新) 怒りの日には、富は頼りにならない。慈善は死から救う。

この格言は、富はツェダカーなしに「怒りの日」(=神の審きの日あるいは不幸な死、突然死)に頼りにならない、と語る⁵⁸。それ故にツェダカーは命に対する効果的な保証となるということである⁵⁹。ところでこれらの格言がトビト書4章10節では再解釈され、ツェダカーが「施し」(ἐλεημοσύνη)にとって代わられている⁶⁰。

施しをすれば、人は死から救われ、暗黒の世界に行かずに済むのである。

これはツェダカーが後に「慈善、施し」を意味するようになったことを示唆していると思われるが、箴言のこの格言では、ツェダカーの意味は、「慈善」に限定せず、慈善を含む「正しい行い／善行」を意味していると捉えるのがよいのではないかとと思われる⁶¹。

(2) 箴言11章18節

רָשָׁע עֲשָׂה פְּעֻלַּת-שֹׁקֵר וְזָרַע צָדָקָה שֹׁקֵר אָמַת

57 Murphy, *Proverbs*, 72. Cf. Scott, *Proverbs • Ecclesiastes*, 73.

58 「怒りの日」という表現はヘブライ語聖書では他に2箇所現われるのみである (エゼ7: 19, ゼファ1: 18)。その2箇所ではいずれも「主の怒りの日」となっている。

59 Cf. McKane, *Proverbs*, 436.

60 Cf. Murphy, *Proverbs*, 73.

61 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 71.

(口) 悪しき者の得る報いはむなしく、正義を播く者は確かな報いを得る。

(新) 神に逆らう者の得る収入は欺き。慈善を蒔く人の収穫は真実。

この格言では、ツェダカー(「慈善」)をザラ(「蒔く」)と、ツェダカーが農業用語で語られ、ラシャー(「神に逆らう者」)とツェダカーを蒔く者が対比されている⁶²。ツェダカーを蒔くとは、何を意味するのであろうか⁶³。対比を考慮するならば、それは悪人が行う虚偽(シェケル)⁶⁴に基づく行為ではなく、善行に基づいて努力することが考えられる⁶⁵。そのような努力の人は真実の報いを収穫するのである。この格言では、ツェダカーは「慈善」という特定の行為よりももっと広い意味で使われているように思われる。

(3) 箴言16章8節

טוֹב-מַעַט בְּצְדָקָה מִרַב תְּבוּאוֹת בְּלֹא-מִשְׁפָּט

(口) 正義によって得たわずかなものは、不義によって得た多くの宝にまさる。

(新) 稼ぎが多くても正義に反するよりは、僅かなもので恵みの業をする方が幸い。

これは、AはBよりも良いという比較のトープ Spruch (格言)である⁶⁶。この格言では、ツェダカー(「恵みの業をする」)は、ロー ミシュパート(「正義に反する」)と対比的に使われている。格言そのものの意味が新共同訳と口語訳では異なるものとなっているが、新共同訳に少し無理があるように思

62 ツェダカーが自然との関わりで出てくる章句としては、他にイザ45: 8, ホセ10: 12, ヨエ2: 23, アモ6: 12参照。

63 悪を蒔く者については箴22: 8参照。

64 シェケル(「欺き」)とセヘル(「収穫」)に語呂合わせが見られる。

65 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 71-72. 岩波訳はもちろんのこと、新改訳もこの11: 18のツェダカーを「義」と訳出している。

66 ツェダカーをツァディークに置き換えた同趣旨の教訓詩が詩37: 16に見られる。さらに同趣旨の箴15: 16のトープ Spruch ではツェダカーの位置に「主を畏れること」が置かれている。

われる。ビ・ツェダカーは、やはりこの場合、副詞的に「ツェダカーで」と理解すべきであろう。即ち、「ツェダカーでの僅かなものは」であって、「僅かなものでツェダカーを」ではない。口語訳の方が本文の用語法に即した訳と思われる。

新共同訳はツェダカーを「恵みの業をする」と意識しているのであるが、ツェダカーを「業」と捉えるのはよいとしても、恵みの業とは一体何であろうか。ロー ミシュパート（不義）との対比を考えると、不正のない「正しい行い」あるいは「公正な行い」の方がツェダカーの意味としては分かりやすいと思われる⁶⁷。

4 命と死 (11 : 19, 12 : 28, 16 : 31, 21 : 21, 11 : 5, 11 : 6, 13 : 6)

(1) 箴言11章19節, 12章28節

① 箴言11章19節

בְּיָצְרָקָה לְחַיִּים וּמְרַדְּף רָעָה לְמוֹתוֹ

(口) 正義を堅く保つ者は命に至り、悪を追い求める者は死を招く。

(新) 慈善は命への確かな道。悪を追及する者は死に至る。

最初の「ケーン」(口語訳「堅く保つ者」、新共同訳「確かな」)をどう訳すべきか困難を覚えるが、この格言が命と死をめぐる二項対立的並行法の格言であることは明瞭である。

この格言は、すでに経済の項で見た前節の11章18節「神に逆らう者の得る収入は欺き。慈善を蒔く人の収穫は真実。」と密接に結びついているものであるが、ツェダカー(「慈善」)は倫理的・道徳的悪を意味するラアー(「悪」と対比関係にある。従って、「慈善」よりも意味範囲の広い「正しい行い」

善行」の方が合っているように思われる⁶⁸。これは、12章28節の場合にも当てはまる。

② 箴言12章28節

בְּאֵרֶחֶב צְדָקָה חַיִּים וְדֶרֶךְ נְחִיבָה אֵל־מָוֶת

(口) 正義の道には命がある、しかし誤りの道は死に至る。

(新) 命は慈善の道にある。この道を踏む人に死はない。

この格言において、口語訳と新共同訳は、「死に至る」、「死はない」と逆の訳をしているが⁶⁹、אל をマソラ・テキストの読み通り、否定の副詞(アル) (「ない」とるか、前置詞(エル) (「～へ、に」とるか)で解釈が分れる。否定の副詞(アル)の後では通常未完了動詞が来て、禁止命令を形成する。しかし、この格言では否定の副詞の後に来ているのは、未完了動詞ではなく、名詞、マヴェト(「死」)なので問題となる。その点、前置詞(エル)ととる場合には問題は解消される。新共同訳は、マソラ・テキスト通り、否定の副詞ととって、これを対立的並行法による「二つの道」ではなく、統合的並行法による「一つの道」の格言と解釈している。上記の格言は、例えば、14章27節のこれまた統合的並行法的格言と似ている(19:23参照)。

主を畏れることは命の源 死の罟を避けさせる。

14章27節から判断すると、箴言では、「ツェダカーの道」と「主を畏れること」が同義的に理解されていることが分かる。箴言では、「主を畏れること」は悪を離れることで実現される⁷⁰。12章28節の「ツェダカーの道」(オラハ

68 岩波訳はもちろんのこと、新改訳もこのツェダカーを「義」と訳出している。ウルガタは11:19のツェダカーだけを clementia(「憐れみ深いこと」と訳出している。

69 NRSV も新共同訳と同じ訳をしている。なお、口語訳は、ネティーバー(「道」)を本文の毀損と理解し、七十人訳に基づき「道」ではなく「誤り」と読み替えている。BHS 脚注参照。

70 箴言3:7, 8:13, 16:6 参照。

67 詩11:7にヤハウエがツェダカー(複数形) (「恵みの業」)を愛することが詠われているが、この場合のツェダカーとは、2節及び5節に描かれている悪しき者の悪行の対極にある神のツェダカーを反映する人間のツェダカーであり、それは「善い行い」を意味するのであろう。Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 70.

ツェダカー⁷¹)に「慈善の道」よりも「正しい行い／善行の道」の含意を見るべきではないかと思われる。

(2) 箴言16章31節

עֲטֹרַת תְּפִאֲרוֹת שֵׂיבָה בְּדֶרֶךְ צְדָקָה תִּמְצָא

(口) しらがは栄えの冠である、正しく生きることによってそれが得られる。

(新) 白髪は輝く冠、神に従う道に見いだされる。

この格言では、ツェダカー(「神に従う」)の道が長寿に繋がることが語られている。20章29節「力は若者の栄光。白髪は老人の尊厳。」を見ると、16章31節の教訓的性格をもつ後句は後から付加された印象を受ける。新共同訳が「神に従う道」と訳した「ツェダカーの道」(デレク ツェダカー—この表現はヘブライ語聖書ではここだけ)はどのような道を意味するのであろうか。並行・対比語句がないので判断が難しいが、白髪＝長命を報いとする道とは、「正しい行い／善行の道」を考えるのが妥当と考える。何故なら悪を追い求める者には長寿が約束されないからである(箴11:19参照)。

(3) 箴言21章21節

לִדְרֹךְ צְדָקָה וְחֵסֶד יִמְצָא מִיָּם צְדָקָה וְכִבוֹד

(口) 正義といつくしみとを追い求める者は、命と誉とを得る。

(新) 恵みと慈しみを追い求める人は 命と恵みと名誉を得る。

ツェダカー(「恵み」)を追求することは命に関わることを告げるこの格言では、すでに現代の聖書の訳語比較のところでも言及したことであるが、ツェダカーが2回繰り返して出てくる。口語訳は後句のツェダカーを削除して訳出していない⁷²。ツェダカーは使われていないが、これに似た格言に箴言22章

4節がある⁷³。

主を畏れて身を低くすれば 富も名誉も命も従って来る。

21章21節では、ツェダカーを追求して得られるものが、「命」、「ツェダカー」(「恵み」)、「名誉」となっているが、22章4節では、「主を畏れて身を低く」して得られるものが、「富」、「名誉」、「命」となっている。21章21節との違いは、ツェダカーの代わりに「富」が来ていることである。そこから推測すると、二番目のツェダカーを削除しない場合、それを「繁栄」と訳出してもよいかも知れない⁷⁴。最初のツェダカーに関して言えば、箴言におけるツェダカーとヘセド(「慈しみ」)の併置はここだけであり、ヘセドとの併置を考慮するならば、新共同訳の「恵み」は理解できないことではない(詩103:17参照)。しかし、この場合、「恵み」とは、何を意味することになるだろうか。

(4) 箴言11章5節, 11章6節, 13章6節

以下の3つの格言では、ツェダカーが人の行動や生き方を変えさせ、あるいは救う力をもつものとして登場している⁷⁵。同じ主旨の格言で、ツェダカーが前句ではなく、後句に出てくるものは、10章2節と11章4節(3経済の項(1))ですすでに検討済みであるが、以下はツェダカーが前句に現れる格言である。

73 箴8:17-18では、富と名誉は人格化した知恵を追い求める人が見いだす、となっている。

74 ホーは、富、名誉、命、ツェダカーの4つの祝福を語る箴言があった可能性を考えている。Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 64-65.しかし、トーイは二番目のツェダカーを書記の重複誤写だとする。Toy, *Proverbs*, 406-407.

75 フォン・ラートによれば、ツェデク／ツェダカーは「一つの領域のようなもの、人間を引きつけ、特別な行為を可能ならしめる力の場」と考えられていた。フォン・ラート『旧約聖書神学I』, 498. K.コッホは、ツェダカーを倫理的行動を可能にする力、「作用磁場」という言い方をする。K. コッホ(荒井章三・木幡藤子訳)『預言者I』(教文館, 1990), 120.

71 「ツェダカーの道」(オラハ ツェダカー)という、この表現は聖書では、この12:28と8:20の2箇所だけにしか出てこない。

72 七十人訳も二番目のツェダカーを削除して、訳出していない。

① 箴言11章 5 節

צְדָקַת תְּמִים תְּיַשֵּׁר דְרָכּוֹ וּבָרְשָׁעָתוֹ יִפֹּל רָשָׁע

(口) 誠実な者は、その正義によって、その道をまっすぐにせられ、悪しき者は、その悪によって倒れる。

(新) 無垢な人の慈善は、彼の道をまっすぐにする。神に逆らう者は、逆ら
いの罪によって倒される。

この5節と次に取り上げる6節は、未完了形動詞の使用、形式、テーマの点で対になっている。この格言では、ツェダカー(「慈善」)とリシュア(「逆らいの罪」)が対比されて、ツェダカー(「慈善」)が、タミーム(「無垢な人」)の歩みを保証するものとなっている。ツェダカーがリシュア(「邪悪」)と対比されているので、ここは「慈善」でない方がよいと思われる。「邪」の反対語・対照語は「正」であり、「悪」の反対語・対照語は「善」、「良」であり、「慈善」ではない⁷⁶。ツェダカー(「慈善」)が、イエシャリーム(正しい人)の歩みを保証することを語る次の箴言11章6節も同じ趣旨の格言である。

② 11章 6 節

צְדָקַת יְשָׁרִים תְּצִילֵם וּבְהִנּוּת בְּגֵדִים יִלְבְּדוּ

(口) 正しい者はその正義によって救われ、不信実な者は自分の欲によって捕えられる。

(新) 正しい人は慈善によって自分を救い 裏切り者は自分の欲望の罠にかかる。

箴言13章 6 節は上記の格言とよく似ているが、ツェダカーが主語となっている点で異なる。

76 反対語対照語辞典編纂委員会編『活用自在反対語対照語辞典』(柏書房, 1999), 265, 12参照。

③ 13章 6 節

צְדָקָה תִּצְרֵחַ תִּסְלַף וְרָשָׁעָהּ תִּסְלַף חַטָּאת

(口) 正義は道をまっすぐ歩む者を守り、罪は悪しき者を倒す。

(新) 慈善は完全な道を歩む人を守り 神に逆らうことは罪ある者を滅ぼす。

この格言の後句が口語訳と新共同訳では異なっている。口語訳はこの格言に交差法(abc, c'b'a')を見ているのであろうか。確かに後句は訳しづらい。岩波訳は交差法をとらず、後句を「だが、邪悪は、罪へと〔道を〕曲げる」と訳出しており参考になる。ともあれ、タム-デレフ(「道をまっすぐに歩む者」)を保証するものとしてのツェダカー(「慈善」)は人格化され、これまた人格化されたリシュア(「神に逆らうこと」)と対比されているので、この場合、ツェダカーの訳としては、「慈善」よりは一般的な意味での「正しい行い／善行」の方がよいと思われる⁷⁷。

5 ヤハウエ (15 : 9, 21 : 3)

以下の二つの格言は、ヤハウエとの関係において、社会における善行、あるいは適切な倫理的振る舞いに関わる実際の行動を強調していると考えられるものである。

(1) 箴言15章 9 節

תּוֹעֵבַת יְהוָה דְרָךְ רָשָׁע וּמְרִדָּהּ צְדָקָה יֵאָהֵב

(口) 悪しき者の道は主に憎まれ、正義を求める者は彼に愛せられる。

(新) 主は逆らう者の道をいとひ 従うことを求める人を愛される。

ヤハウエ(主)のトーエバー(「いとう」)の格言である。15章8節にもヤハウエのトーエバーが出てきており、8節と9節は対になって密接に結びついている。メラデーフ ツェダカー(「従うことを求める人」)はツェダカーを

77 Cf. Toy, *Proverbs*, 263.

追い求める人であり、ヤハウエに愛される者である。ヤハウエのトーエバーの対象はラシャー(「逆らう者」)の道である。「道」は社会的広がり、行動を意味するので、ラシャー(「逆らう者」)の道と対比されているツェダカーは「正しい行い/善行」を意味すると見た方がよいであろう⁷⁸。たとえヤハウエの名が出てきても、焦点は、ヤハウエとの関係(例えば、「従う」というような)ではなく、横のつながりとしての人と人との関係であると考えらるからである。

(2) 箴言21章3節

עֲשֵׂה צְדָקָה וּמִשְׁפָּט נְבָחֵר לְיַהוָה מִזִּבְחַ

- (口) 正義と公平を行うことは、犠牲にもまさって主に喜ばれる。
 (新) 神に従い正義を行うことは いけにえをささげるよりも主に喜ばれる。

この比較の格言では、ツェダカー(「神に従い」)は、ミシュパート(「正義」と結合して出て来る。M. ヴァインフェルトによれば、このような結合は二詞一意(hendiadys)であり、社会正義を意味する⁷⁹。ツェダカーがアサー(「行う」)との関係で出てくることは、理念ではなく、ツェダカーのもつ実践的要素が強調されていると見ることができる⁸⁰。

21章3節では、アソー(アサーの不定詞連語形)ツェダカー ウー・ミシュパートとなっているのであるが、詩編119編121節以外、アサーという動詞の後に、ミシュパート、そしてツェデクの順序での、この二つの言葉の連結はなく、多くはミシュパートとツェダカーとの連結である。21章3節のように、アサーの後に、まずツェダカーが来て、次にミシュパートという例は、箴言21章3節以外では、創世記18章19節と詩編103編6節の2箇所のみであ

78 すでに見たように、新改訳は、岩波訳と共に、このツェダカーを「義」と訳出している。

79 Moshe Weinfeld, “Justice and Righteousness” -משפט וצדקה-: The Expression and Its Meaning,” ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), 236. アモ5:15, 24, ミカ6:8, ゼファ2:3, イザ33:5, エレ51:10, 詩99:4参照。

80 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 72.

る。いずれにしてもツェダカーとミシュパートの結合が社会正義を意味するとすれば、ヤハウエの名が出てきたとしても、新共同訳の「神に従い」が適訳であるかどうかは疑問である。

以上、箴言に出てくるツェダカー18回の用語法と語義を、ツェデクの場合と同様に、同義語、並行語、類義語、対比語等を参照しつつ検討した。そのまとめを、ツェデクとツェダカーの用語法と語義の異同を中心に以下簡単に記すことにする。

C 箴言におけるツェデクとツェダカーの用語法と語義の異同について

箴言におけるツェデクとツェダカーの意味は必ずしも様ではないが、その用語法と語義から、それらが「正しいこと」あるいは「善いこと」と関係し、共同体の生活を支える基礎となる規範的・実践的概念であることが分かる⁸¹。両語は、祝福され安定した共同体を目指す「知恵」あるいは「政治」との関係で共通して出てくる。しかし、ツェデクが、証拠を提示し、正しい判決を言い渡し、真実を明らかにする「裁判」との関係で出てくるのに対し、ツェダカーはこの「裁判」との関係では1回も出てこない。一方、ツェダカーはツェデクには出てこない救いを意味する「経済」や「命と死」、あるいは社会における倫理的に適切な行動の教えである「ヤハウエ」との関係で出てくる。即ち、「裁判」のことを除いて、ツェダカーはより広範な生と死に関わる共同体生活との関連で出てくるということである。

箴言には、ツェデク/ツェダカーが相換性をもつと思われる箇所が散見された(8:20, 11:5, 16:12)。これは、ツェデク/ツェダカーが、それほど区別されないで用いられる場合もあったことの証しかも知れない⁸²。し

81 フォン・ラート『旧約聖書神学I』, 493-497は、ツェデク/ツェダカーを共同体における「共同信義」(Gemeinschaftstreue)の視点から捉えようとする。Cf. BHL, 942-944.

82 ツェデク/ツェダカーの語義の異同について、七十人訳もウルガタもあまり参考にはならない。七十人訳は名詞の場合には、ツェデクとツェダカーに区別をつけず、「義」、「正義」を意味するディカイオスネーで統一している。それはウルガタでも同じである(但し、11:19は除く)。

かし、ツェデク／ツェダカーの相換性を認めつつも、なお、ツェダカーが「行う」(アサー)と結びついて出てくること、それと共に、ツェデクが「道」(社会的広がりと実践)との関係で出てくるのは1箇所(2:9)であったのに対して、ツェダカーは、それが6箇所(8:20, 11:5, 12:28, 13:6, 15:9, 16:31)であること等を考慮するならば、ツェダカーが正しく善い行いに関係する実践的意味合いをもつ語として使用されているとの印象を強くする。A・イプセンは「ツェデクは、正しい秩序を示し、ツェダカーは、秩序を目標とする正しい関係を示す。後の時代では、ツェデクはツェダカーの機能として受取り、これを具体化するものと考えた」と述べているが⁸³、これは箴言のツェデク／ツェダカーを考える場合にも参考になる。ヘブライ語聖書において、ツェデクには複数形は出て来ないが、ツェダカーには複数形が出て来るのは、数えられるという具体性と何か関係があるのであろうか。(続)。

83 A. Jepsen, “ צדק und צדקה im Alten Testament,” H.G. Reventlow (hrs.) *Gottes Wort und Gottes Land* (Goettingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965), 80.イプセンと同じ考えに立つ学者は多い。Cf. Schmid, *Gerechtigkeit als Weltordnung*, 179. Ho, *Sedeq and Sedeqah*, 76. Perdue, “Cosmology and Order in the Wisdom Tradition,” 458. Weinfeld, “Justice and Righteousness,” 236.しかし, J.J.Scullion, “RIGHTEOUSNESS,” in *The Anchor Bible Dictionary*, V ed. D.N. Freedman (New York: Doubleday, 1999), 724-36 は、ツェデクとツェダカーの明確な意味上の区別に対して批判的である。